

体、もう死んでもよい、いや、死にたくない。故国にたどり着くまではと、元氣を取り戻しておろす。

もう夜中の十二時、貨車おろしが済むと下の線路上の掃除。土砂があると脱線するから、私が各車を見回りして、終了引き揚げの指示をした折、収容所内日本人大隊副官某軍曹来たり、線路掃除やり直しと指示する。私は終了であると宣言、副官と大げんか。果ては暗夜吹雪の線路上、中隊員の見ている前で、貴様日本人か、同胞を一人でも多く故国の土を踏ますのが我々の責任だぞ、貴様はこの場でぶち殺してやると、大格闘。ソ連軍警戒兵や作業監督らが駆けより仲裁に入り、一応終了。

この件で我が中隊兵は非常に私を信頼してくださる、私も大変うれしかった。

日独共同の運動会

石川県 河原 三雄

敗戦間際の根こそぎ動員で、補充兵として大連の自宅から朝鮮軍に応召した私は、戦後も北鮮に抑留されて、ソ連船の荷役作業などに明け暮れたが、昭和二十二年七月、羅南港からハバロフスク経由のシベリア鉄道に乗せられた。帰国の夢も水泡に帰し、三年にわたるソ連抑留が始まった。

季節外れの粉雪が舞うウラル山脈を抜け、貨車の旅三十日目下車したところは鉱山地区、アルチョモスクであった。ここでは戦車のキャタピラをつくる大規模工場での作業だった。

気温が極端に下がってくる夜間作業に、破壊された溶鉱炉のれんがを運び出す仕事は、不なれと心労とで辛苦の連続であった。

三か月後、我々はさらに西方に移動し、たどり着い

たのはウクライナのドニエプロベトフスクというところであった。西へ西へと遠ざかるにつれて、満州に残してきた家族の安否が無性に気がかりだった。

ここは黒海の北岸、クリミヤ半島のセバストポリ港から北へ五百キロ、地名のとおりヨーロッパ第三位の大河ドニエプロ川の沿岸であった。有刺鉄線に囲まれた収容所には、すでに独ソ戦で捕らわれたドイツ人兵士三千人が先客としており、そこへ我々五百人近くが加入したのである。

ラーゲルの寝所といえ、大戦で破壊された軍需工場の地下通路を利用したもので、その片側三段に使い古したわらむしろが敷かれていた。ストープは全くなく、狭い寝床に抱き合うようにして寝かされるのは、かつての大戦でソ連軍が体験した困苦を、日独の兵隊にもなめさせる底意があるように思われた。

裸電球がホタル火のように一つ二つ光る下でひと寝入りしたところ、朝食用の黒パンが配られる。早朝の作業の出發時に、朝食時間を節約するためである。焼きたてのパンの香気はたちまち空腹の虫をたたき起こ

し、朝まで大事にとっておく者は一人もいなかった。作業から戻ると、時々、女性軍医による例の「身体検査」がある。裸になった尻の部分を一人ずつ指先でつねられ、その肉の肥瘦度によって健康、体力の等級が決められるのである。一級は重労働に耐える者で、屋外の重量物運搬や、道路工事に敷きつめる岩盤の掘削など。二級は一般的な作業。三級になると屋内での軽作業で塗装や清掃、靴直しの木釘づくり等であった。これらにすべてノルマが課せられ、その成績いかんによって食事給与も加減される仕組みであった。

冬季の作業はとりわけつらかった。川面全体が氷結したドニエプロ川に我々十人の班が出かける。分厚い防寒外套を着たま、直径三センチ、長さ二メートルの重い鉄棒で氷面を突いて突いて穴をあけ、一抱えの大きさに仕上げた氷塊をトラックに積み込むのである。切りあげた氷の下には深緑色の流水がとうとうと音を立てており、足を滑らしたら最後、一命を失う危険さだが、過労と無気力からの虚脱感でさほどの恐怖心もわず、トラックが戻ってくるまでの約十分間、

氷上におつ倒れて束の間の安息を味わうのだった。対岸まで一キロの茫漠たる氷原に、刺すような寒気に耐えながら過ごした。この無我の一刻が今に忘れられない。この氷塊は付近の農村の夏の飲料水に使われるということであつた。

長い冬から覚めたウクライナの春が足早にやつてきたある休養日、思いがけない収容所の運動会が日独共同で開かれた。ドイツ側は走高跳びや、幅跳び、あるいは三段跳び、百メートル競争など陸上競技に続々と出場し、ベニヤ板でつくった手製ギターをかき鳴らしながらの応援ぶりは、日ごろの暗さを吹き飛ばす盛り上がりようである。

彼らの歓声に比べ、片や日本側は意気さっぱり上らず、広場の片隅で軍隊式体操を一通りお目にかけて程度で、あとは先方の競技を観戦するのみ。体力の減退から当然のこととはいえ、同じ抑留の身ながら民族的な意欲の格差を見せつけられた一日であつた。

それ以来、彼らとの間に交流も生まれ、寝所を訪ねて、ドイツから届いた家族の写真を貼つてあるはがき

を見せてもらつたりして、言葉は通ぜずとはいえ、親しみを増していった。ベルリンのオリンピックに出た日本選手の名を覚えていて、平泳ぎで競つたというドイツ人もいて、久しぶりに和やかな気分を味わつた。

やがて、待ちに待つた「ダモイ」の日が来た。また残つてゐるドイツ人たちと「アウフ ヴィダー ゼーエン」(さよなら)の握手を交わし、三十五人の友を葬つた墓地に遙拜して、歓喜を満載した帰還列車は再びウラルの山脈を越え、一路東方へ向かつた。太く長い黒煙が原始林の彼方に消えていった。

祖国は遠かつた

岩手県 西野津 一

昭和二十年八月二十九日、武装解除させられた私たちは音徳爾(イントール)の町はずれの草原でトタンや板を集めて小さな小屋をつくり、気の合つた者が三、四人で暮らしていた。毎日帰国を楽しみに、小屋の修